



神聖かまってちゃんとSMAP

アイドルとロックバンドが夢を与えるために

みんな「自由に」のなり方がわからないんだと思います。私もずっと「もっと自由になっていいよ」と言われてきましたが、やり方がわからない。自由って、どうやってなるの？って。

雑誌『群像』の対談で作家である本谷有希子が言ったことばだ。

さらにいうと、高橋源一郎は新人賞の選考をしていた。もうちょっと冒険してもいいと思います、なんでじぶんでこんなに狭く定型におさめちゃうんだろう、もっと自由にやればいいのかと思う、と語ったことに対して言ったのが本谷有希子のさきのことばである。

↓

群像

GUNZO 10

2013
** はじめての小説

2冊のデビュー小説 宮下道 読み巻
高橋新一郎・角田光代・本谷有希子「読む」
** 2冊のデビュー小説 多和田葉子「おかしな話をして」
清水良典 2冊「デビュー小説 読者を読んだ作家たち」
** 2冊のデビュー小説 藤野千夜「アフォーゲイスト(アキシム)のラブ」
** 2冊のデビュー小説 藤野千夜「時穴みみか」

たしかに。そうだ。でも、その「自由」っていうものがむずかしい。おとなは「自由にやれよ」とかんとんに言ってくれるが、自由とはなにかを一向に教えてくれない。

じぶんなりにズレたことをやるとけっきょく怒られる。それが「社会」らしい。というか、学校か。

↓

お笑い芸人のhanaは、学生時代の美術の時間にあることを実行していたという。この絵を書きましょうという課題が与えられたとき、実際のモチーフの色とは全然ちがう色を塗っていた。先生は聞く。hanaくん、なぜきみはこんな色にするんだ？「先生…、ぼくは、この色に…見えるんですよ…」とむずかしい顔をしてというのがポイントらしい。わたしは『アオイホノオ』のホノオモユルをイメージしてしまったぞ。

そうすると、美術の先生はなぜだか「この子はなにかとてつもないものを持っているかもしれない」と思って高得点をつけてくれるそうだ。じっさいにはhanaはそれで学生時代に美術5をとりまくっていたらしい。

はなわのエピソードから得る教訓は「ハツタリ」の必要性である。



わたしたちは小学校のころからじぶんに正直にいなさいと教えられてきた。だから、作文や感想文を書くときも心にも思っていないことは字にしてはいけないと思いついてきた。じっさいのことこそ真実だと。正義だと。感動を生むのだと。それ以外はだめなのだとして刷り込まれてきた。

しかし、今になって思う。わたしたちが心動かされるのはフィクション（捏造）ではないか。たとえば、アニメもそうだ。映画もそう。テレビドラマもそう。

思い出すことがある。2014年の夏に行われたテレビ番組「FNS27時間テレビ」だ。↓

思い出すことがある。2014年の夏に行われたテレビ番組「FNS 27時間テレビ」だ。今回の司会はSMAP。土曜日の夜からスタートする番組は日曜日の夜9時まで続く。SMAPメンバーはテレビに出続ける。

今回アツかったのは、番組終盤に27曲のノンストップメドレーだ。時間にして45分間。



中居正広はとちゅう疲労で歌えなくなったり、水を飲む姿が目についた。さらには、ステージから出て行ってしまふ。わたしたち視聴者にも目にみえて分かった、「これは、死ぬほどキツイのだ」と。

ただでさえ、45分間歌い踊り続けるという困難に追加して、彼らは一日寝ていない。さらに、番組の企画でプールに入ったり、走ったり、お笑い芸人と肩をならべてしゃべり続けている。そんな疲労がつみかさなっているなか、最後の最後に45分歌い続けるノンストップメドレーだ。

しかし、歌のステージに上がった彼らは笑顔でそれを振り切っていく。↓

しかし、歌のステージに上がった彼らは笑顔でそれを振り切っていく。ファンに向けて、テレビの視聴者に向けて笑っているのである！これは驚く。それまでカメラに見せていた疲労をいっさい消して笑顔でステージに立っているのだ。彼らが身体ボロボロになりながら歌い踊っていることがメドレーの中盤から目に見えてわかってくる。ときに顔をしかめたりするのだ。でもまたすぐに微笑む彼ら。

謎の感動がむねにこみ上げてきた。

↓

これは『Gu-Guガンモ』（細野不二彦、一九八二）の構造と似ている。

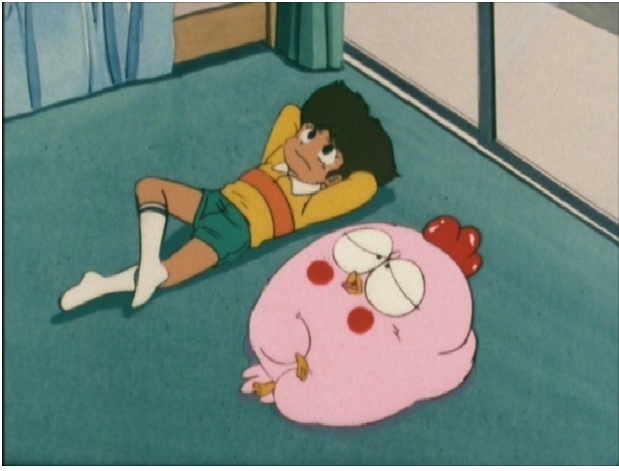
マンガ『Gu-Guガンモ』には、ガンモという鶏みたいな生きものが登場する。役に立たないドラえもんのような存在だ。



マンガのラストシーンでガンモは元の世界に帰ってしまう。

マンガのラストシーンでガンモは元の世界に帰ってしまう。そのとき、すべての人々のガンモに関する記憶をぜんぶ奪ってしまうのだ。ガンモがいなくなって、主人公の家では、ガンモがいなかった頃とおなじような生活が続いていく、ガンモがいない世界で、ガンモがいないことに気づくこともできない。さみしい気持ちすらない。

↓



それでも主人公は、何か足りないような気がしてしょうがない。でも、それがなんなのかな全然思い出せない。

ガンモはすごくコーヒーが好きで、飲むと酔っ払うという設定だった。それまでマンガの中で何回もギャグに使われている。

そしてラストシーン。主人公がコーヒーを飲んだら、なぜか涙が止まらない。悲しいはずはないんだけど、主人公は涙があふれて止まらなる。

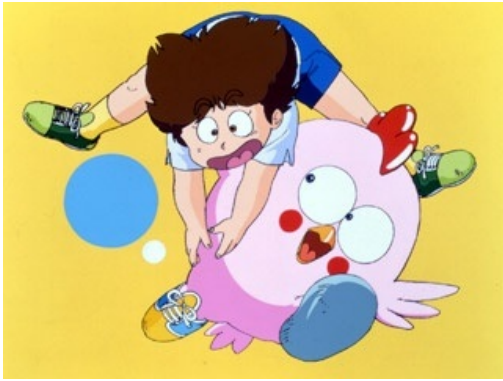
心を打つ話だった。



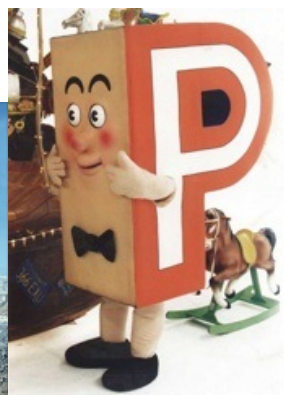
そうした演出によって『Gu-Guガンモ』のラストは語り草になっている。

↓

主人公はそれまでの記憶を無くしてあるべき姿に戻っているが、わたしたち読者だけがガンモとの日々を知っている。そして、主人公が悲しいはずなのに涙が溢れ出てくるということによって、ガンモとの日々はもうないけど確かにあるんだ！でも主人公は元の生活をしていくんだ！ということによって切なさが出る。



SMAPライブにもこれがあった。



彼らはそれまでの27時間テレビでの疲労なんかなかったようにメドレーを笑顔で歌って踊っていた。「アイドル」を真っ向から引き受けていた。でもわたしたちは知っている。彼らが昨夜からどれだけ動き、どれだけ喋っていたか。ノンストップメドレーに入る前、彼らは1時間なにもない無人カメラだけがあるスタジオに取り残されてメンバーだけで喋るという企画のとき疲労がしゃべり方や表情からみてとれた。

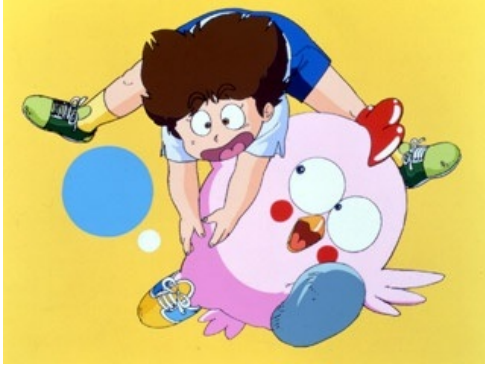
それまでの27時間近くがまるでなかったように↓

それまでの27時間近くがまるでなかったように歌って踊って「アイドル」をやっているが、わたしたち視聴者だけが彼らの一日の身体の酷使を知っている。しかし、歌と踊りを続けていくうちメンバーの一日の疲労がこぼれ出てくる。でも彼らは「アイドル」として45分間を笑顔でまっとうしなければならない。ここでわたしたちは感動する

。

↓

さきほどのガンモに例えてみる。アイドルとしてノンストップメドレーを歌うことは元の生活だ。それまでの27時間ちかくエンタメ企画を行ってきたのがガンモとの日々である。彼らが笑顔で歌を歌う姿はガンモがない元の生活だ。メドレー中、表情が歪んだり踊りのキレがなくなってきたり歌も歌えないほどになってくる姿は、主人公が記憶を失っているのになぜだか涙があふれてくる姿に重なる。



終盤は全気力をつぎ込んでアイドルの「夢を与える」という命題をまっとうしようとした。その疲労の姿があったからこそ、笑顔で歌って踊るアイドルとしての役割にてっしている姿と27時間テレビの身体酷使の姿がリンクしてせつなさが生まれる。そして感動するのだ。

さらに、最初の方で書いた「ハッター」につながる。身体がボロボロなのに笑顔で歌い踊るその姿は最高のハッターである。しかし、わたしたちはそのハッターに感動するのだ。

↓

本当は歌も歌えないほど踊りも踊れないほどに疲労していることをじつはわたしたち客側も知っている。でもそんなことはないですよ、というSMAPのウソを客側も共有している。だから、ノンストップメドレーでヘトヘトになっている彼らに「もうボロボロだから止めて」ではなく、「がんばって」といえるのだ。そこにじぶんの夢を託しもしている。

本物ではない。ハツタリにわたしたちは感動して勇気付けられるのだ。



綿矢りさの小説『夢を与える』を思い出す。アイドルとして芸能活動をしていく主人公が終盤であることを悟る。それが「夢を与える者は、夢をみてはいけない」だ。



まさに27時間テレビのSMAPがそれだった。↓

まさに27時間テレビのSMAPがそれだった。どんなに身体がボロボロだろうとアイドルとしてステージに立ったなら人に夢を与える役割をしなければならず、休憩するといった自分の思いは二の次なのである。



神聖かまってちゃんはインターネットでどんどんじぶんを出していく。それによってロックシーンのなかでは多くの誤解を生んでるし、矢面に立たされている。それならいっその他のバンドのようにインターネットでの露出はひかえるべきか。

いや、そうじゃないだろう。



いまの10代にとってインターネットこそ遊び場である。↓

いまの10代にとってインターネットこそ遊び場である。そこに行かないで何が現代のロックバンドだということなのか。



神聖かまってちゃんはじぶんたちを偶像とさせない。それが彼らの選択だ。それはさきほどのアイドルの話と比べると、夢を与えていないじゃないかという印象となる。だが違う。彼らは夢を与えるために「夢をみてはいけない」に従っているのだ。

インターネットがこれだけ生活に張り込んだ現代で、偶像としてイメージを作って言って活動していこうという方がいま夢をみているということになるだろう。



↓

自分の偶像を作って人気を得ようなどという昔時代の夢はもう通用しない。神聖かまってちゃんはロックバンドとして人に夢を与えるために、音楽シーンがそれまで仕掛けていた古い偶像戦略にノーを突きつけた。

ネット時代・現代の夢の与え方をやっているのだ。←



うおお

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ